ボルネオ島の環境問題に対する社会心理学的アプローチ

3年1組21番　中尾 想南太（共同研究者　境井　聖馬）

1.はじめに

今よりお互いをより良く想い合える対人関係を構築できる社会を作りたい、そして心理学の法則を用いて現状を変えていきたいと思っていた。ちょうどその時、人の環境問題への意識を変え、問題を解決をしようとしているクラスメイトと出会い、2人で人の意識を変えることができるのかを確かめるべく、実験が始まった。そこで目についたのがハンドソープだ。このハンドソープはクラスメイトが問題視しているボルネオ島の熱帯雨林を分断するプランテーションで栽培される植物由来だ。今はコロナ禍のため、多くの人は今まで以上によく手を洗う。1年生の授業でも、環境に配慮された認証マーク付きのハンドソープについても学習した。学習した私たちは意識しているのだろうか。この日々使われるハンドソープを探究の材料に用いれば、人々の無意識のうちにどのような行動を取るのか知ることができるのではないか、そして全校生徒（実験対象者）の注目を浴びすぎず、かつ多くの数値を獲得できる実験ができるだろうと考えた。その実験の中で心理学を用い、対人社会へのアプローチの効果に注目したテーマを設定した。

2．序論

・目的（問い）

国際高校生は、過去に学んだボルネオ島の環境問題について意識し、解決に向けた行動を取れているのであろうか。

・資料と方法

本校の1、2年生を対象に各階の手洗い場およびトイレに、RSPO認証のハンドソープとそうでないハンドソープを設置した。2021年11月1日から長期休暇(冬休み)までの土日を除く放課後に、電子天秤を用いハンドソープの使用量を調べた。私たちの中には無意識に過去の行動を一貫しようとする一貫性の法則という心理法則がある。私たちはまず1年生、2年生の各フロアの手洗い場とトイレに、ボルネオの環境問題を説明しているポスターやポップを目につくような場所に貼り、それらを見た事により過去の学びを思い出させ、RSPO認証ハンドソープを使う行動に結びかせるようにはたらきかけた。

3．本論

・結果と分析

1. RSPOハンドソープ使用量の推移

ボルネオ島の環境問題について学んだ事のある国際高校生を対象にし、実験を行った。
まず初めに、1週目2週目については何も示さず、RSPO認証のハンドソープ とそうでないハンドソープを並べて置いた。

(図1)

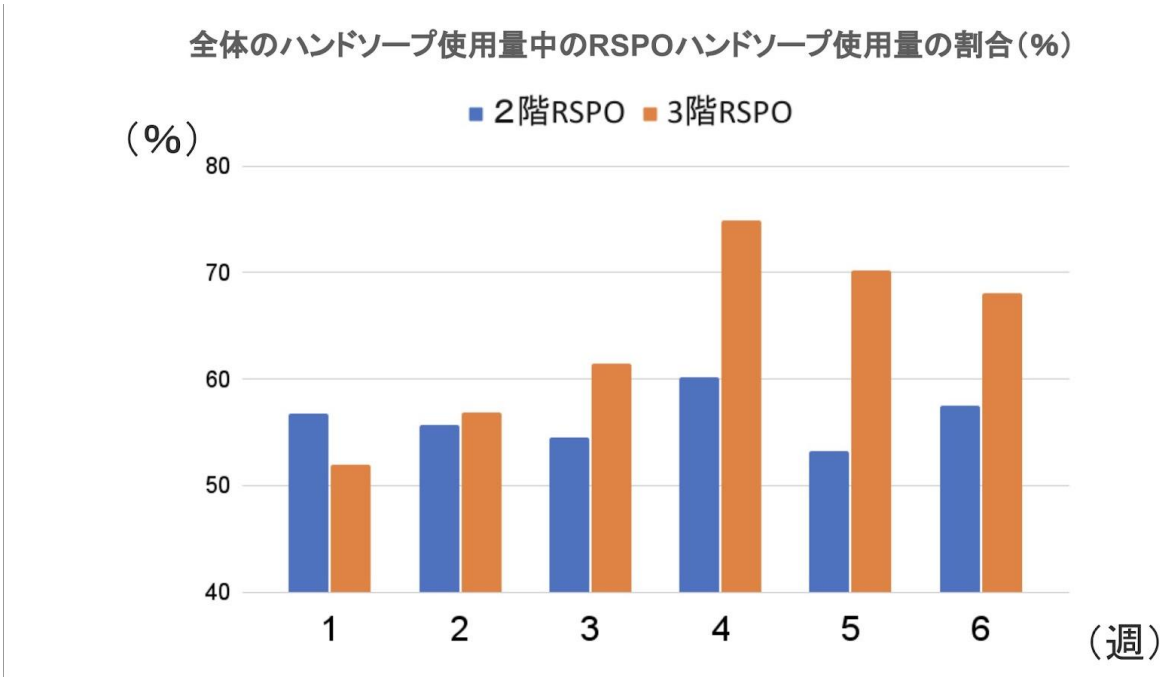

図1は、全ての場所に設置したハンドソープの全体使用量中のRSPOハンドソープの使用割合のグラフである。青色のグラフが1年生、オレンジ色のグラフが2年生である。その結果、1週目では、1年生のRSPOハンドソープの使用量が55パーセントを占めていた。また、1、2年生共に1週目では、RSPO認証のハンドソープの使用量の方が多かった。ここで私たちが考えたことは、2つのハンドソープを見た人たちが過去に勉強したという学びを活かそうとして、RSPO認証ハンドソープを使用したのではないだろうかと考えた。また、これは過去の自分の行動と一貫したものといえるので、一貫性の法則が働いていると考えた。

2.一貫性の法則の適用

3週目と4週目にはボルネオの環境問題とRSPO認証を説明するポップそしてポスターを掲示した。その結果、2年生のRSPO認証ハンドソープ使用量の割合が、4週目に75パーセントまで上がった。この結果から、掲示しているポスターやポップを見たことにより過去の学習を振り返ることができ、一貫性の法則がはたらいたと考えた。興味深いことに、2年生の2週目、3週目、4週目のRSPO使用割合が伸び続けていることがわかる。それに対して1年生の使用割合の伸びには、大きな変化が認められなかった。

3. アンケートの結果

国際高校生の1、2年生を対象に計148人にアンケートを実施した。その結果を次のようにまとめる。

質問1・一方のハンドソープがRSPO認証を受けていることを知っているか
はい101人 (68.2%)　いいえ47人(31.8%)

質問2・どちらのハンドソープを使用したか
RSPO85人(57.4%)　RSPOでない39人(26.4%)　どちらでもない24人(16.2%)

質問3・国際高校ではどちらのハンドソープを使用したいか

RSPO 89人(60.1%)　RSPOでない 11人(7.4%) どちらでもない 48人(32.4%)

質問1の「一方のハンドソープがRSPO認証を受けていることを知っているか」という問いには、68.2%の人がはい、31.8%の人がいいえと答えた。質問2の「どちらのハンドソープを使用したか」という問いには、57.4%がRSPO認証のハンドソープを使用した、26.4%がRSPO認証のないハンドソープを使用した、16.2%がどちらでもない、と答えた。「国際高校ではどちらのハンドソープを使用したいか」の問いには、60.1%がRSPO認証の受けたハンドソープを使用したい、7.4%がRSPO認証を受けていないハンドソープを使用したい、32.4%がどちらでも良い、答えた。

質問1の結果から、アンケートに答えた人の約半数以上の人がRSPO認証を知っていてハンドソープを使用していたことがわかる。過去の学びが行動を起こしていたので、一貫性の法則を改めて再確認することができた。

質問3の結果から奈良県立国際高等学校ではRSPO認証のハンドソープを使用したいと答えた人が60.1%いたことから、約半数以上の人がRSPO認証のハンドソープをこれからも使用したいことがわかった。このことから、ボルネオ島の環境問題を学び、解決に向けての行動が取れていると考えた。だが、このアンケート結果から新たな課題が生まれた。それは、質問3でどちらでもないと答えた32.4%の人の意識をRSPO認証ハンドソープがいいと思ってもらえるように変えることだ。

4. 考察

私たちの高校では、グローバル探究という授業がある。この授業の目的は、世界にある様々な環境問題や社会問題について学びを深め、解決に向けた行動を起こすといった「探究力」「行動力」を養うことである。図2はこの授業におけるカリキュラムを模式的に示したものである。1年生の時は、共通でボルネオ島の環境問題について学んだ。それ以降からは個人が興味を持つ環境問題や社会問題について探究を深めている。

今回行った研究の時期では1年生は1ヶ月前までボルネオの環境問題やRSPO認証について勉強していた。一方で、2年生がボルネオ島の環境問題を勉強し始めてから1年以上経っている。本来ならば2年生はRSPOハンドソープの使用割合が低くてもおかしくないはずだが、なぜか高い。

我々は、この現象を次のように解釈した。2年生は、ボルネオの環境問題やRSPO認証を忘れている人が多いと考えた。しかし、2年生は様々な社会問題に対する探究をしたことによって社会問題全体の意識が高まり、環境に配慮したRSPOハンドソープを使用したと考えた。一方、1年生は社会問題に対する探究の経験が浅いので行動にむすびつかなかったと考えた。

私たちは今回の研究を通して、主に2つのことを発見した。1つ目は、国際高校生はRSPO認証のハンドソープを積極的に使っていた事から、過去の学びを活かしてボルネオの環境問題を解決をするような行動をとっているということである。2つ目は、一貫性の法則を使ったはたらきかけにより、国際高校生はボルネオの環境問題を積極的に解決するような行動をとったということである。

私たちが今回行った一貫性の法則の社会心理学的アプローチは環境問題を解決する手段の1つになるのではないだろうか。

図2　グローバル探究のカリキュラム模式図

5.結論

国際高校生はRSPO認証のハンドソープを積極的に使っていた事から、ボルネオの環境問題を解決をするような行動をとっていることがわかった。つまり私たちは学びを活かすことができていた。さらに、一貫性の法則を使った働きかけにより、国際高校生はボルネオの環境問題を積極的に解決するような行動をとった。

6.おわりに

今回の実験を通して、いくつかの気づきがある。まずは自分の力で人の意識を変えられるということだ。そして人々には無意識のうちに自らの行動を一貫したものにしようとする「一貫性の法則」がはたらいていることもわかった。「一貫性の法則」については研究をスタートさせた時はインターネットで調べたものにすぎなかった。しかし、この研究を通じてそれが、本当に身近でも起こる現象なのだと知ることができてとても興味深かった。また、

この実験を行う以前も、行っている間も多くの人の協力があってこそ実現可能になったと改めて思い知らされた。私自身の物事に対する気持ちも大きく変わった。今までなら何かに取り組む時、心のどこかで「本当にできるのか」と考えていたが、今の私は「まず、やってみよう」と思えるようになったのだ。これはかなり大きな変化だと思うので大切にしていきたい。今後の自分自身の生き方として、あの時すればよかったと後悔するくらいならば、1歩前に出てやりきったと言える人になれるような生き方をしようと思う。どのテーマにもあてはまることかもしれないが、人はひとりでは何もできない。自分の周りにはいつも一緒に行動してくれる人、そして助けてくれる人がいることのありがたさをよく理解した。難しいことや、苦労することは沢山あるけれどその先に待っている「成長」に目を向けていきたいと考えている。

7.参考文献・出典

影響力の武器 なぜ、人は動かされるのか [第3版] (原タイトル:INFLUENCE 原著第5版の翻訳)/ロバート・B・チャルディーニ/

8.謝辞

本論文の作成に当たり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。サラヤ株式会社代島裕代様、NPO法人ラストジャパン岸　裕子様、奈良県立国際高等学校の松本 真紀様、水本 祐之様にご協力、ご指導頂きました。ここに感謝の意を表します。